

2022 FD・SD研修
マクロレベルFD・SD 研修実施報告書

群馬医療福祉大学 FD・SD委員会
看護学部 佐竹・巴山

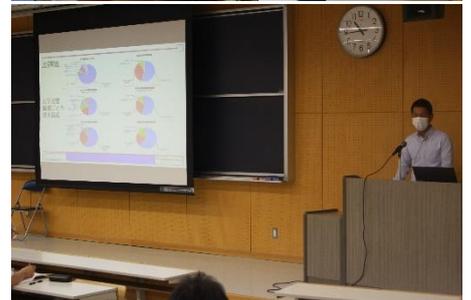
〈研修実施日時〉 令和4（2022）年 9月14日（水） 10：30～14：45

〈会場〉 群馬医療福祉大学前橋キャンパス 大講義室／1号館41J教室及び各会場

〈参加者〉・所属常勤教職員 155名※（全166名中）（出席率93.4%）※Zoom出席者を含む
・非常勤講師9名

1. 目的

令和6年度の受審を予定しているため、認証評価を見据えた内容とする。現在、大学は教学マネジメントや教育の質保証システムの構築を意識すべき時代に入っている。そこで、まずはこれに関連する基礎知識を共有すること、また、これから先の未来において、本学としていかに学生を授業で育てる仕組みを作るか、ということをして「教養教育プログラム」をキーワードにしながら、全員で検討し合うことを目的とする。



2. テーマ：

・「大学教職員としての基礎知識の共有と、教養プログラムの検討」

3. 研修の概要

3-1) (第1部) 全体研修 「認証評価に向けて：大学教職員としての基礎知識を共有する」

① 10:30～10:45 学長指示 学長 鈴木利定

② 10:45～11:05 「大学を取り巻く厳しい環境について」(20分)

認証評価統括準備室 副室長 (事務

長) 鈴木 靖弘

③ 11:05～11:25 「求められる“大学ガバナンス”改革とは」(20分)

社会福祉学部長 大竹 勤

④ 11:25～11:45 「中央教育審議会の答申から見る認証評価のポイント」(20分)



認証評価統括準備室 室長 (高等教育支援センター) 橋本 広信

- ⑤ 11:45~12:15 「教学マネジメント指針」などに見る、質保証システムに必要な道具立て」(30分)

認証評価統括準備室 室長 (高等教育支援センター) 橋本 広信

3-2) (第2部) 講習+グループワーク (90分程度)

- ⑥ 13:15~13:35 (20分) 「全学共通教養プログラムと学部教養プログラムを構想するにあたって
～文理横断・文理融合教育の検討～」

大学改革推進センター 副センター長 田口 敦彦

- ⑦ 13:50~14:45 「全学共通プログラムを構想する」(55分程度)

3-3) 1部、2部の①~⑦の説明をもとにグループワークを実施

・方法は以下の通りである。

- ① 本学の1年次を想定し、15回から30回の授業で構成されるプログラムを1~3程度想定することを目標にする
- ② まず、伸ばしたい「資質」および「能力」のイメージを言語化
- ③ それを実現するために、どのような「知識」や「技能」、「体験」などがあるかを話し合う
- ④ ③で抽出した「知識」や「技術」、「体験」などを学生に教授するために、どのような授業の内容や構成がよいかを検討
- ⑤ プログラムの全体像が浮かび上がったら、プログラムに「名前」を付けてみる



4. 結果 (アンケートの自由記載より抜粋)

- ・学部を超えて、教員職員の枠を交えて、意見交換ができ建設的なアプローチができました。
- ・大学が置かれている環境や現状について理解できました。何よりも入学した学生が、意欲をもって自主的・自発的に学習できるよう、教材開発や教材研究を深め、指導力を高めていく授業を工夫していきたいと思いました。2040年に向けて、本学から出されるプランに沿って自分の授業を見直していきたいと考えています。
- ・理念や「こうあるべき」といった内容が先行し、具体的な目標が分かりづらかった。特にガバナンスのところでは、一般教員ではなく、それなりに立場の方に聞いていただきたい所である。
- ・他学部の先生方のご意見を伺うことができ、また文科省が要求していることを改めて確認でき、有意義な時間でした。ありがとうございました。

- ・自分だけでは考えつかない意見を他の先生方が思いついてくれ、最終的に形になったので、身があるものになったと思う。
- ・文理横断・文理連携に基づく学部共通教養科目の話合いで、各学部の先生方から率直な現在の学生像やいろいろな角度から切り込んだ試案が出て、非常に有意義であった。
- ・午後のグループワークを通して、育成したい学生像を思い描いたときに、私一人では思いつかないアイデアや思考過程に触れることができました。現代を生きる学生はSNS等に影響を受けてコミュニケーションスタイルが大きく変化していることから、その変化に合わせた教育を考えていかなければなりません。そして、変化する事象がある一方で、不変で重要な事象も存在し、そちらも漏れなく教育していくことが大変重要であることを再認識できました。終始、楽しく学べた時間でした。

以上のように、1部の説明が理解できたこと、他学部とのグループワークで目標達成が促進されたなどの肯定的な意見が多くみられた。